

大陸を揺るがした大戦は、気高き薔薇の国と謳われたユデリハン王国の敗北で幕を閉じた。

「国ごと燃やせ。反逆の芽は全て摘むのだ」

戦勝国であるクレスト帝国の筆頭騎士団長、グレン・フォン・ベルシュタインは、誰もが畏怖する英雄である。

緩やかにウェーブした金髪。

人外めいて美しい顔は、歴戦の殺戮で表情筋が死んでいる。

そしてクレスト帝国の平均身長百七十五を優に超える、その身丈は二メートル。

またストイックな鍛錬によって、鎧の他にまで、全身、筋肉の鎧をまとうていた。

腕手首などすら、女子供の胸より太く…末恐ろしく規格外。

そこに、手錠首輪の鎖をひきずりながらも、這い蹲る者がいた。

「もう許してくれ…ッ。国民は何の罪もない！憎悪はこの俺が請け負う。なんでも…なんでも差し出すと誓う！」

恥辱の限りを尽くされた後の薄汚れたボロ着のまま、プライドをかなぐり捨てて傳いたのは、

第一王子であるルシアン・ド・ラヴェンナだった。

「大敗惨敗の極みで、まだ食い下がるとは業腹しい。…だが」

ルシアンは夜闇のような黒髪を持つ、誇り高く輝く王子。

琥珀色のエキゾチックな瞳は意思強く。

長いまつ毛に縁取られた目は、緊張に震えていても、決してグレンを見そらすことはなかった。

白く滑らかでほっそりとした首元は、およそ戦いには似つかわしくない繊細さを醸し出している。

このような扱いは本来受けることの無い、憐憫に苛まれた、麗しの王子…。

グレンは獐猛な目を細め、舌なめずりをした。

「その身の純潔も差し出せるというのならば、考えてやらんことも無い」

豪華な天蓋付きベッドの太い柱に、重々しい金属音が響く。

ルシアンルシアンの白く細い首には、漆黒の繊細な宝石がこれでもかと思われ散りばめられた、美しくも禍々しい首輪が嵌められていた。

肌には赤い情緒の嘔み跡が沢山散り、彼にふりかかる所有欲はむき出しであった。

その首輪から伸びる頑丈な鎖が、ベッドの柱へと固く繋ぎ止められている。

身動きの限られた全裸のルシアンは、シーツの上に這いつくばり、その細い腰を無様に跳ね上げていた。

「くっ♡はあッ…♡はうう〜♡ん…ああ…っ♡」

ルシアン形の丸い尻のふくらみピンクの縦伸びした窄まりには、魔導によって怪しく蠢く、半透明の触手型ペットが深く挿入されていた。

小ぶりなタコのような…うねうねと蠢く粘着質な触手が、頭を入口からくぼくぼくと見え隠れさせながら、ルシアンのもも敏感な内壁を執拗に、そして容赦なく前立腺を擦り上げる。

「んうう…♡しょこ…お♡♡♡♡♡キチャウ…♡だめえ…♡ツツ♡…おお…♡♡」

グレンの住まう豪華絢爛の邸宅にぶち込まれてから、ルシアンは主人の不在時は常に愛玩具で菊門を侮辱されるようになった。

凛々しく気丈な口調を保とうとするものの、絶え間なく与えられる快楽の責め苦。

ルシアンは艶やかな黒髪を柔らかな枕に擦り付け声を殺そうと必死になっていた。

「ふあ…♡あ…♡馬鹿者…♡動くなあ…♡♡」

S字結腸まで触手を伸ばし、こしょ♡こしょ♡と腔内をくすぐり鬨る触手に、ルシアンは「んおおう…♡♡♡♡」と、美しく乱れ髪を散らす。

朝からの絶え間ない肛門陵辱にしかし、その琥珀の瞳は正義を忘れておらず、眉間をぎゅつと寄せ快楽を逃がそうとするルシアン。

…哀れな王子が気位を忘れず恥じらう姿は…かえって見るものを煽るといふことは、ルシ

アンは知る由もないのだが。

「只今帰ったぞ。我が姫よ」

その時、重厚な扉が開かれ、金色の髪を輝かせた巨躯の男、グレンが帰城した。

二〇〇センチに迫る筋骨隆々の体軀は、細身のルシアンを容易く圧殺できそうなほどの威圧感を放っている。

グレンは冷徹な青い瞳で、鎖に繋がれて淫らに悶えるルシアンを見下ろすと、無言でベッドに歩み寄った。

ルシアンは悔しさに唇を噛み締めながらも、震える腰を押さえつけて自らグレンの首元に縋り付き、彼の口に接吻する。

「お……っ♡は……♡っはあ……♡♡、おっ……グレン……様……おかえりなさいませ……ッ……♡」

それは、主人が帰城した際には「自ら媚びへつらい、迎えの接吻を捧げよ」という傲慢たる言いつけによるものだった。

俺は、ユデリハン王国、第一王子……！





